

新たな挑戦！

組合をさらに発展させ、ニンニクを地域の特産品として育てていくためには、生産と市場の拡大、付加価値の高い商品開発が必要です。しかし、高齢化が組合にも押し寄せ、解散する危機もありました。しかし、昨年から農業について見直しがされていく中で、ニンニク作りに賛同してくれる人が現れたり、地域特産物の普及拡大事業を市から受けたたりしたので、新たに挑戦する環境が整ってきました。

組合としても、来年は、植え付けを今年の4倍にして、販売が3倍になるように挑戦したいと思っています。また、都留の特産品である「古渡の梅」と

ニンニク栽培を体験して、文大生から見た曾雌にんにく

都留文科大学

社会学科 環境コミュニティ専攻

1年生 佐藤 光さん

私は、都留市のニンニク事業を知る前まで、ニンニクとは雑草のように強たくましいものだと思っていました。これには二つの理由があります。

まず、それが古来より漢方薬の材であり、万病に効くといわれるほど頼れる薬草であること。2つ目の理由として、私は祖母の家でニンニクに非常によく似た「ノビル」という植物を見たことがあるからです。ノビルは、何の手を入れずとも毎年いたるところに生

「曾雌にんにく」を組み合わせ、「梅にんにく」を商品化しようとも意気込んでいます。夢は膨らむばかりですが、思うように進むかどうか心配です。市民の皆様の暖かい応援を期待しています。



今年収穫された「曾雌にんにく」。今年のできはまずまず。研究と努力の成果が実りました。

えてきます。

しかし、実際のニンニクは、非常に病弱で育てるのが困難とのこと。都留で初めてニンニクを育てたときには全滅してしまったそうで、現に私も畑において病害で傷んだニンニクを抜き取る作業を体験しました。

ニンニク栽培の本場である青森県にまで出向き、育て方を一から学んだ経緯や、一坪オーナーとして市民参加を呼びかけながら特産化を進めていくという取り組みそのものも私にとっては興味深いものでした。

農産品を農業従事者だけが担うので

はなく、その意志さえあれば、誰でも（例えば、私のような学生であっても）関わる事ができるということ。しかもそれはニンニクを育てるだけでなく、まちを育てる一翼を担ってものいるということ。そう考えてみたとき、「もしかしらやっぱりニンニクは強くたくましいものなのかもしれない」という思いにも至ります。

留市での栽培は、東京の市場に売りやすいということも利点であります。この「曾雌にんにく」を都留市の特産品としてより多くの地域に広め、市民がニンニク農業を仕事として確立させれば、都留市にとっても、市民にとっても、メリットがあります。まだまだ、難しく、時間のかかることだと思いましたが、まずはニンニク農業を都留市民に認めてもらうことが必要だと思います。そして、ニンニクを特産品として認めてもらうことで、「曾雌にんにく」というブランドになっていくのではないかと思います。さらに、「曾雌にんにく」の安心・安全をもっと売り込んでいけば、市場でも認められるニンニクのブランドになると思います。市民の方との協力により、これからもニンニク農業を続けられるのではないのでしょうか。

都留文科大学

社会学科 環境コミュニティ専攻

1年生 坂田裕梨さん

私は、ニンニク栽培の体験として、成長したニンニクの中から腐ったニンニクを見つけて、そのニンニクを掘り取る作業をお手伝いしました。私が思っていたよりも腐っているニンニクが多くあり、掘り取ると、つんとしたニンニク独特の匂いがして、その匂いがおいしそうでした。ニンニク作りは実になるのが難しく、手間がかかる大変な作業なのだと感じましたが、手作業でやるという楽しさがありました。その点で、オーナー制度というのは、とても良い制度だと感じました。ニンニク作り体験という貴重な体験ができるのは嬉しいことだと思います。そして、有機肥料で栽培しており、安心・安全は大きな売りの一つであり、また、都



都留文科大学では環境教育の一つとしてニンニク栽培の体験を行いました。初めての体験に戸惑いながらも、作業に汗を流していました。